

ケータイ・ネットと子どもたちの人権 【第7.1版】

黒田恵裕 (インターネット掲示板差別書き込みについて考えるプロジェクト会議)

「学校裏サイト」「プロフ」「ネットいじめ」などが最近注目されていますが、ケータイ(携帯電話)をめぐる子どもたちの危険な状況が指摘されています。子どもの安全のため・友だちから孤立しないために与えたはずのケータイが、子どもを危険にさらし、時には子どもの人間関係を崩してしまう実態があります。「情報と人権」を軸に、子どもたちのケータイ依存やネットの落とし穴、情報リテラシーや人権教育課題について、大人の責任として考えてみましょう。

■1■ ケータイ・ネットトラブルへの対策 ～ 基本は生身の人間関係

子どもに関わる事件の影にケータイありとの報道が相次いでいます。小学生の3割、中学生の6割、高校生のほとんどがケータイを持ち、その大半がメールを使い、Webサイトを閲覧し、個人Webサイト(ホームページ)を持つ子どもも少なくありません。ケータイはもはや電話機ではなくパーソナルネットツールだという認識が必要です。

ケータイがらみのトラブルには特別の対応が必要なのではないかと考えがちですが、やはり基本は生身の人間関係に属する問題です。他者との信頼関係の構築・維持・問題解決の力を子どもたちに育てる取り組みが大切です。その上で、ケータイ・ネットの特性をふまえた活用能力(リテラシー)を身につける必要があります。道具の向こうにいる人をどのように意識し、道具を使っていかに人と向きあうかが課題です。

■2■ メールの落とし穴 ～ 存在の確認と「想像のお化け」

ケータイを手放せないという子どもが増えていきます。友だちとの関係を維持するために頻繁にメールのやり取りをし、互いのホームページをのぞいています。メールやBBS(電子掲示板)への書き込みによって、自分を認知してくれる人間の存在を確認しているともいえます。子どもたちにとって、メール受信や掲示板レスは「自分を認めてくれている」という癒しであり、メール送信は「自分を見捨てないでね」という脅迫的な儀礼として機能している面があります。親密なように見えて、その維持に大変な緊張

を強いられる友だち関係は、互いを受けとめ向き合う関係とは言えません。濃密な同調圧力で維持される友だち関係に神経を使うあまり、「その他の人々は無意味な存在」という感覚に陥る傾向も指摘されます。「相手の機嫌をそこねてはならない」という同調圧力と、「大人や教員、見られたらまずい友だちは見ていない」という思い込みから、同級生や教員などを「盛り上がるネタ」として中傷する行為は、悪質であると同時に、自身の信用を失わせることや、ネット上の自身の評価・位置を守るためにリアルとバーチャルが逆転してしまう不自然さにも気づかせる必要があります。現実の他者との関わり方も学ばせなければなりません。

不安定な自尊感情、異なる人と交わり学ぶ姿勢の不十分さ、「互いのしんどさとは向き合わない」「異質を

■危うい「友だち」関係■

友だちづきあいの気苦労

他者とのコミュニケーションや多様性を学ぶ機会の減少
→ 反差別の仲間づくりを難しくしているのでは？

「互いのしんどさとは向き合わない」
「他人の存在は気にとめない」
「他人は、盛り上がるネタでしかない」
おたがいの悪口はさける

- ・「3分以内に返信」→友だちからハズされる心配
※自尊感情の不足→「つながっていないと不安」
- ・「文字」以外が見えない
→「想像のお化け」(誤解・恠意的解釈)
- ・解釈のズレ・感情の増幅・匿名のエスカレート
フレーミング(炎上) 例えば...**体育大会を休んだら。**
- ・注意力散漫、ことば以外の表現力・理解力不足



「教室は たとえて言えば 地雷原」

排除する」という傾向は、反差別の仲間づくりを難しくしているのではないのでしょうか。

また、コミュニケーションの7～8割はノンバーバル(非言語)と言われますが、文字列だけでは相手の意図を「想像で穴埋め」せざるを得ず、そこに誤解や拡大解釈という「想像のお化け」が発生します。学校でのトラブルが放課後のネットに持ちこまれ、ささいな不満も同情を引きつけるために誇張され、友だちの間を飛び交うメールが「悪人」を仕立て上げます。これがホームぺやBBSに持ちこまれ、「匿名によるエスカレート」が加わると、自分の悪口が延々と記されたページを見つけたり、そのアドレスをメールで受けとった子どもは、数多くの友だちが閲覧しているだろうことにも恐怖と不安を感じ、学校へ行きづらくなります。頑張っても、ケータイを手にする友だちを見ただけで体が震えるといいます。

子どもたちのメール相手やホームぺの相互訪問者が直接知り合う友だちであることが、敵意や不安の増幅(フレーミング)という悪循環を生み出しています。

■3■ サイト閲覧の落とし穴 ～ 世界の実験台とフィルタリング

1999年にケータイからのネット接続が可能となり、2007年にはモバイル市場が1兆円を超した日本は、豊富なケータイWebサイトがある唯一の国です。日本の子どもたちは世界の実験台にされてきたともいえます。

奈良県では、啓発連協「インターネット掲示板差別書き込みについて考えるプロジェクト会議」が取り組む「インターネットステーション」の活動により、一定の成果も上げていますが、残念ながら、ネット上には有害・差別的なBBSやWebサイトは無数に存在します。ケータイからしかアクセスできないWebサイトも多数存在し、子どもたちは、保護者や教員のチェックを受けずに、そうしたWebサイトにも簡単にアクセスできます。そして、ケータイを使いこなせない大人の目をかいくぐり、学校裏サイトなどに、子どもや教員の悪口が日々書き込まれているのが実態です。ケータイからの地図閲覧や映像投稿を駆使した極めて悪質な差別事象も今後増える恐れがあります。

2008年、18歳未満の青少年にはフィルタリングが原則義務づけられましたが、問題点も多く指摘されています。さらに技術的対策だけで解決できる問題ではないことも忘れてはいけません。

■4■ ホームぺの落とし穴 ～ 中高生のホームぺと「ネットいじめ」

■ホームぺの落とし穴■

1. 格好をつけてしまう……偽りの自分
だます・だまされるの関係
2. 思わぬ誤解を生んでしまう
対面コミュニケーション→8割が非言語
テキスト→2割しか伝わらない
→誤解や悪意の拡幅
3. 想像以上に人を傷つけてしまう
「夜も眠れず、学校にも行けなくなる」
教室で、ケータイを持っている子が怖い

★社会的責任感を身につける前に、
自分に都合のよい世界を手に入れる危険
★直接知り合う友だちとのネットトラブルが、
リンクやメールで友だちに一気に広がる恐怖
★バーチャル(仮想)とリアル(現実)の逆転→居場所保持

1/739表示中
残り2278件がOK!
秋葉原で人を殺します
06/08 05:21
車でつっこんで、車が使えなくなったらナイフを使います
みんなさようなら
【親記事編集】

究極掲示板(改)

加藤容疑者の書き込み
※佐世保事件にも通じる

中学生の2割・高校生の3割が、自分の個人サイト(ホームページ、ホームぺ)を持っており、頻繁に更新している子どもたちも少なくありません。中高生のホームぺは、パソコンやケータイで瞬時に作れるサービスを使ったものが多く、プロフ(プロフィール)・日記・写真・BBS・リンクなどから構成されます。プロフは、相当数の中高生が持つネット上の自己紹介カードのようなものですが、自ら書き込んだ個人情報から巻き込まれる犯罪、なりすましプロフによるいじめ等が問題視されています。

日記・写真・BBSなどには、保護者や教員はもちろん、仲の良い友だち以外は絶対見ないという前提のものも多く見られ、自分の名前や顔写真を明らかにしながら同級生を中傷する事例も珍しくありません。

友だちへのささいな不満や悪口も、ネット上では短時間で拡幅されてしまいます。閲覧者の気を引こうとする心理が働き、相互批判を許さない「友人関係」を維持するため、「盛り上がるネタ」として心ない中傷が書き込まれがちです。リンク先には学校で毎日顔を合わせる友だちが多いことから、中傷はすぐに広まり、思わぬ迫力で敵意や恐怖を生むわけです。傷ついた子どもは、書かれた事実だけでなく、「多くの友だちがそれを閲覧しているだろう」「また何か書かれるかもしれない」という不安や恐怖で、ケータイを手にする友だちを見ただけで体が震える子どももいるわけです。これが一般の電子掲示板、とりわけ「学校裏サイト」になると、匿名を隠れみのにして、さらに悪意を込めた書き込みがなされることもあります。

■5■ ケータイリテラシー ～ 自主的ルール作りと「ききみみ」

不安な日々を過ごしている子どもは必ずいます。「どうせバレない」「たいしたことはない」と高を括っている子どももいます。被害者ケアは当然ですが、加害者へのアプローチも不可欠です。学校や行政は定期的な実態調査を行い、対策に取り組む必要があります。

ケータイは豊かな人間関係を創る可能性も秘めた道具ですが、誤解や悪意を拡幅し、子どもを絶望に落とし入れ、取り返しのつかない罪を招きかねない道具でもあります。「表現の自由」

や「アクセス権」も大切な権利ですが、「子どもの成長への責任」放棄の言い訳にははいけません。家庭でも、ケータイ利用のルール作りや利用実態の把握を通し、信頼と責任のある監督をすべきです。学校においても、ネットリテラシー教育や自主的ルール作りに取り組みしましょう。保護者や教員もケータイ・ネットにある程度明るくなることが求められています。こうした事態に心を痛めている子どもはたくさんいます。子どもたちの経験や思い、アイデアを引き出して、子どもたちの自主的な取り組みを形にしていきましょう。「子どもたちに教えてもらう」ことで、子どもたちとの面と向かった関わりを持つことが大切です。

忙しい親や教員に十分に関わってもらえず、友だちともなかなか本当の話ができなければ、子どもたちもネットに没入するしかないのではないのでしょうか。人間は人として受けとめられなければ、生きていけないのではないのでしょうか。子どもたちは「気づいてほしい」「聞いてほしい」と願っています。そして「認めてほしい」「見ていてほしい」と願っています。これを私は、

■子どもたちへ■

★「情報を読み解く力」・「情報を発信する責任」・「自分を守る力」

かみわよおある

- ★大切な話は、直接会い、顔を見て
- ★ネット＝みんなが見ている
- ★ネットで人の悪口を書かない
- ★読み手の気持ちを考えよう
- ★トラブルは、信用できる大人に相談
- ★不要・有害情報に飲まれるな、悪用するな
- ★我が家や友だちとのルールをつくらう
- ★体と心を使って、しっかりと外で遊ぼう



■おとな(保護者・教員)たちへ■

- たっぷりと「外遊び」(自然体験)→心身の発達
ゲーム・ビデオでは身につかない「人としての力」
- 他学年の子どもや地域の大人とのかかわり→社会性
さまざまな人の存在を受けとめ、学ぶ力
- じっくりと話し合える親子関係→自信(自尊心感情)・安心
「フィルタリングまかせ」=親子関係の不在
- ケータイをなぜ持つか、どう使うかの話し合い
納得できるルールづくり→目立つところに貼ること
安易にフィルタリングを外さない、ネットを共に体験
- 子どもの話をじっくり最後まで聞く、発言する機会を大切に
生身の「居場所」体験がないと、ネットへ逃避せざるを得ない

「き・き・み・み」と自分に言い聞かせています。ケータイ・ネットの問題も、「人として子どもをしっかり受けとめる」「人としての人との関わりを身をもって示す」ということが基本だと思います。

私は、「ネット上の人権文化創造」「2つのJ(人権と情報)」を念頭に諸サイトの運営をしてきました。参考資料・図書等を個人サイトで随時更新しています。ご参考になれば幸いです。(2009.7.10改訂)